令和 5 年度 厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）
併存疾患に注目した認知症重症化予防のための研究
分担研究報告書

高血圧と認知症に関する研究

研究分担者 **山本浩一** 大阪大学大学院医学系研究科老年・総合内科学 教授

研究要旨

我々は多施設医療機関の65歳以上外来通院高血圧患者のデータを用いて、認知機能低下の実態について研究を行っている。今回、縦断データを用いて解析した結果、認知機能低下の改善、進展と握力に関連があることが示された。

A. 研究目的

高齢者高血圧において、潜在的に認知機能が低下している症例は少なくはない。さらに、軽度認知機能障害(MCI)では特に、認知機能が変化するケースも見受けられる。我々は、外来通院中の高齢者高血圧症例を対象に、認知機能変化に関連する因子について、多施設共同で検討を行った。

B. 研究方法

全国6つの専門機関の高血圧外来に通院中の65歳以上の高血圧患者で、認知症の診断がついておらず、Mini-mental state examination (MMSE)が施行可能であった248名(年齢76.0±6.0歳、男性123名)を対象とした。MMSE 23点以下の対象者を除外し、MMSE 27点以下を認知機能低下と定義した。ベースラインと1年後にMMSEを含めた総合機能評価と筋力検査を行い、1年後に新たに認知機能低下を認めた群をコンバート群、また認知機能低下から1年後に認知機能の改善を認めた群をリバート群と定義した。

（倫理面への配慮）研究計画は各施設の倫理委員会で承認され、参加者から書面上の研究同意を得た。

C. 研究結果

ベースライン調査では、74名が認知機能低下群に分類された。1年後のフォローアップでは、認知機能非低下群174名のうち36名がコンバート群に、認知機能低下群74名のうち38名がリバート群にそれぞれ分類された。コンバート群は、認知機能維持群より高齢であり、家庭血圧が高く、1年後に握力低下に分類される対象が多かった。多変量解析では、コンバート群に年齢(オッズ比1.1, 95%CI 1.0-1.2)と1年後の握力低下(オッズ比2.8, 95%CI 1.07-7.32)が関連していた。リバート群は、認知機能

低下持続群よりも年齢が低く、握力が弱かった。多変量解析では、リバート群には1年後の握力低下(オッズ比0.1, 95%CI 0.01-0.36)が関連していた。

D. 考察

高齢高者血圧において、約30%に潜在的な認知機能低下を認めた。また、1年間で認知機能が変化するケースを高率に認めた。コンバート、リバートともに1年後の握力との関連が認められ、握力の変化と認知機能の変化に関連があることが示唆された。認知機能と筋力が同時に低下する認知フレイルの概念を支持する結果と考えられる。

E. 結論

高齢者高血圧患者の経時的な認知機能変化は筋力の変化と関連する。

G. 研究発表

1. 論文発表 なし

2. 学会発表

第45回日本高血圧学会総会

高齢者高血圧における潜在的な認知機能変化に関連する因子の検討

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし

2. 実用新案登録 なし

3.その他 なし